

2016年12月29日 青少年自立支援センター ビバハウス
責任者 安達 俊子

いよいよ年の瀬も押し迫って参りましたが、皆様方にはお褒りなく、ご健勝の事とお察し申し上げます。お陰様で私たちも、何とか一年の活動を終了し、本12月24日より、新年13日までの冬休みに入らせて頂きます。これもひとえに、この一年も変わらぬご支援を下さいました皆様のお陰です。心よりの感謝を申し上げます。

経験の長い主任指導員の坪内秀樹さん、1昨年5月よりスタッフとして頑張っていた高崎雄平さん、お二人の大奮闘のお陰で、本年前半は最近ないほど順調に推移してまいりました。ところが突然10月3日に、高崎さんから辞意の申し出があり、その理由が、「今のままの自分では、心に決めた、将来ビバハウスの後継者になるにはふさわしくない、さらに3年ほどしっかりと自立支援について学んできたい」との事でしたので、受け入れざるを得ませんでした。早速その日から、大ピンチを迎えましたが、現在は、食事専門の経験の深い女性ボランティア、さらに広島からわざわざ北星余市高校の教育実態に関心を持って、ヒッチハイクで余市を訪ねてきた24歳の男性(滋賀大学卒業、小学校教職免許所有者)に来年3月までの期間限定ですが、臨時指導員の任務をお願いしています。

本年最大の喜びのひとつは、ビバハウス創設以来どんな時でもビバハウスを支え続けて下さった北海道職員の柳田基貴さん(ビバハウスとの最初の出会いは倶知安保健所職員として、ビバハウスのグループホームとしての認定を取っていただいた～現在留萌振興局勤務)が10月14日に宮城県で行われた「自治研 全国集会」で「奨励賞」を受賞された事だ。このテーマの核心はビバハウスと「風のがっこう」との共同事業を中心としたものである。

本年最大の痛恨事はビバハウスができるまえから3人で一緒に暮らしてきた愛犬ビバをこの10月17日早朝に失った事です。ビバは今年の雪解け後、突然大量の毛が抜けたため、お世話になっている小樽のペットクリニックで診察を受けました。先生の診断は、これまでの心疾患が悪化した事に合わせ、肝臓に腫瘍が出来ているという事でした。ビバはだんだん歩けなくなり、尚男の退院後毎日3度欠かさなかった散歩も出来なくなっていました。1日でも長くビバと一緒にいたいため、1週に2,3回の割合で俊子が運転し小樽の病院へ通いました。夏ごろにはビバは、寝たきりになり、寝たままおしっこをするのでひどい床ずれになりましたが、ビバの最後はまさに眠るがごとく安らかでした。